

# 郷土史への扉

# 大隅国分寺の式

シリーズ大隅国を知る (最終回)

三国名勝図会



国分寺

国分寺の建立に至るまでの話は前回しましたが、今回は大隅国分寺が建てられた時期とその規模、さらにはその後について紹介します。

## 一・建立の時期

国分寺は、聖武天皇が鎮護国家と五穀豊穡を願って、天平十三(七四一)年、国ごとに僧寺と尼寺の建立を命じたことから始まります。国分寺の建立の時期については、それぞれの国の経済力や人員(技術者)の確保、さらには統治力などの実情によってかなり差が生じました。

大隅国は、当時天災などが多く発生し、ほかの国に比べてだいぶ遅れたようです。その様子はさまざまな文献に次のように書かれています。  
七六四年 大隅・薩摩の境で大噴火

- 七六六年 台風被害の発生
- 七八八年 神造島地震で住民避難
- 七九一年 曾之山(御鉢)噴火
- 八〇〇年 豊後・日向・大隅で飢饉
- 八〇〇年 大隅・薩摩に班田収授が敷かれる

八〇一年 隼人の朝貢を停止する  
このように、大隅国は八世紀(701~800年)後半は天災や飢饉に繰り返し見舞われ、九世紀(801~900年)に入ると律令国としての基盤が整備されていったようです。弘仁十一(八二〇)年に書かれた「弘仁式」に大隅国分寺の名が初めて登場することから、大隅国分寺は九世紀初頭に建立されたと思われます。

## 二・国分寺の位置と範囲

聖武天皇は、南に開けた小高い場所で人々が参詣しやすい静かなところに国分寺を建立するように命じています。大隅国分寺は、後背に城山から連なる尾根が控え、正面には天降川が流れ、その先には錦江湾や桜島を望む標高12メートルの微高地にあり、聖武天皇が示した条件に合っています。

現在、大隅国分寺跡は国指定史跡となっており、発掘調査によって、国分寺で使われていた瓦(布目瓦)や土器、国分寺の北限と南限の遺構などが確認され、寺域はかなり広い範囲にあったことが分かりました。

しかし、寺の範囲や建物の配置は未だ明らかになっていません。これは、大隅国分寺がこれまでたどってきた歴史と深い関係があります。



## 三・苦難の大隅国分寺

本来、国分寺は東西南北に合わせて造られ、周辺の町並みや耕作地などとも寺に合わせますが、現在の町並みは北西―南東方向と大きく傾いています。これは、島津家第十六代当主島津義久が、慶長九(一六〇四)年に舞鶴城を築城し、城に合わせて城下町(現在の国分市街地)も造り変えました。この出来事が、それまであった国分寺やその周辺地形を一変させ、国分寺は現在の国指定地ほどの大きさを残りました。

江戸時代後期に書かれた三国名勝図会には、「観音堂と石造の五重塔が残る草庵となったが参拝者は絶えない」と記されています。ちなみに、国分寺の南側の道路は「観音筋」という名前が今でも残っています。

国分寺の境内のほとんどが昭和二十年代まで墓地だったことも調査が進まない理由の一つです。葬式は土葬で、国分寺の遺構は墓穴を掘る際に壊されたためほとんど残っていません。

さらには、明治新政府によって布告された「神仏判然(分離)令」は、神道と仏教の分離が目的でしたが、結果として廃仏運動が起こり、特に薩摩藩内の寺院はことごとく破壊されました。大隅国分寺跡にある首や腕のない仁王像はその面影を残しています。

このように、大隅国分寺は幾多の苦難に遭いながら今日に至っています。『国の華』とうたわれた国分寺は、「国分」という地名の由来でもあり、全国でも限られた場所にしかない貴重な史跡なのです。

\* \* \*

大隅国建国1300年記念として、昨年1月から「大隅国を知る」と題したシリーズでお伝えしてきましたが、今月で最終回です。次回からは、霧島の歴史について紹介していきます。  
(文責 鈴)